

染 香

ぜんこう

福 泉 寺 寺 報
令和7年8月
第 136 号
毎月 1 日発行

墓じまい

「子どもにお墓を守る負担をかけたくない」
そんなお声を、お盆参りの際によくうかがいます。

墓石の撤去は近年加速度的に進んでいます。
十年ほど前までは、年間七万件ほどだったのが、今では十五万件にも上るそうです。高齢化と少子化が主な理由だと言われていますが、実際に参りをさせていただくと、他にも要因があるように感じています。

私はご法事で「おじいちゃんの名前は？」
「おじいちゃんはどうな仕事をしていたの？」
「おじいちゃんはどこに住んでいたの？」など、小さい子によく質問します。そうですね、60％くらいの子は答えられます。この子たち（の家族）は、お盆や彼岸に限らず、よくお墓参りをします。（さらに、「おじいちゃんの院号法名をそらで言える？」と聞きます。2％くらいのお孫さんは答えられます。ご参考までに。目指せ10％！）

ふとしたことでもいいです、ほとんど会ったことのない家族について知ると、お墓や仏壇の「向こう側」をありありと想像でき、今までと手を合わせる心持ちが変わることもあるでしょう。しかもそれは、若い人に限りません。

守られている

さて、「墓じまい」という定義なき言葉ですが、公的な手続き上は「改葬」というそうです。改葬は「遺骨の移動」の事ですので、その上にある「墓石の撤去」とは切り離して考えます。

つまり私たちの墓じまいは、お骨の移動による「手を合わせる場所の移動」を指していて、「手を合わせる場所の消滅」を意味しているわけではありません。

現代では、ご先祖さまや親の生きた世界を知らされないまま、お墓の維持管理だけが残ってしまい、そこに現代特有の「生きづらさ」も相まって、ますますお墓は「重荷」となっていくのでしょうか。

私たちのほとんどが、何代も前のご先祖様のことを知らないように、私たちもまた「忘れる」存在です。そのような人生の中で、本当に大切なことは何だろうか、このお盆というシーズンに考えてみたいものです。



(住職)



いまさら仏教！



【六道】

仏教における六道とは、

- ①地獄道…苦しみだけの世界。
- ②餓鬼道…常に飢えと渇きに苦しむ世界。
- ③畜生道…欲望のままに生きる世界。
- ④修羅道…争いばかりの世界。
- ⑤人間道…様々な感情や煩惱を持つ世界。
- ⑥天道…喜びや楽しみがあるが、長続きしない世界を指します。これらの世界は、生前の行い（業）によって決まるとされ、これらの世界を輪廻すると考えられています。これらの六道から抜け出すことを「解脱」といい、仏教のゴール（目標）です。

浄土真宗は、他力（阿弥陀如来のはたらき）にて解脱を実現する宗教であり、その証こそ称名念仏によって顕わされているのです。

ちょっと あたまの こりほぐし

「たちつみと」
これ、なーんだ？

★最近もらってますか



おてらより

お盆参り、

ありがとうございました

たくさんのお勤めと、おしゃべりで、今年もかけがえない日々を送らせていただきました。改めて感謝申し上げます。
次は「報恩講参り」(10/1)です。よろしくお願いいたします。

秋の永代経・お彼岸法要

日時：九月二十一日(日) 十四時～十六時

講師：三木秀海 師

★本堂裏にご家族のお舍利さんが
ある方は、ぜひお参りください。
本堂裏にてお勤めいたします。

施設訪問、出来る時に…

★縁あって、現在二か所の施設の入居しているご門徒さんのところに面会に伺っています。面会、というよりも、楽しくおしゃべりに行くような気分です。もしご希望があればおっしゃってください。

命終畏（みゆうじゆうい）

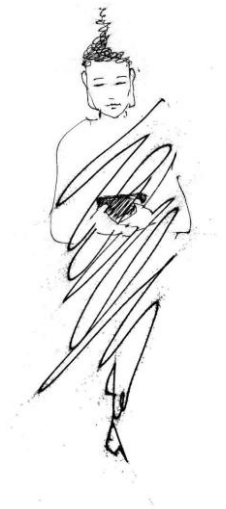
解決できない大きな問題

小学校4年生のとき、友だちと映画館で、千葉真一さん主演の『海底大戦争』を見たことがあります。

その中で、タクシーの運転手さん、八百屋さん、サラリーマンなどの一般市民が誘拐されて、海底の秘密基地で、半魚人の化け物に改造されるんですね。化け物に改造されていますから、地球を守る正義の主人公たちは、彼らを光線銃で撃って、次々と倒していくわけですよ。

恐ろしい怪物なんて、早く倒してほしいというのが人情かもしれません。けれども、この人たちは、かつてのお父さんだったり、学生さんだったりした一般市民なのに、おぞましい姿に変えられた上に、なんで殺されなければならぬんだという不条理が、ずっと尾を引いていました。

もう後半の30分ぐらい震えが止まらず、映画が終わっても、腰が抜けていしばらく立てなくなりました。その晩から一週間以上、毎晩毎晩、「死んだらどうなんねやろ」って悩みました。想像しては、布団の中で泣いてね。



それに気づいた母親に、「死んだらどうなんの」って聞いても、「分からないけど一生懸命生きたらええのよ」と言うだけで、問題は解決しません。そんなとき、国語の教科書に、厄難が詰まったパンドラの箱が紹介されていて、そうか、死の恐怖を心の箱の中に閉じ込めればいいんだと思ったんです。

今から考えたら、けっこう大胆な想像力ですよ。でも、閉じ込めたら、明くる日から、けろつとしてね。今まで通りに過ごせたんです。でもいつか、もう一度、対峙しなければならぬ。いつてことは分かっていたわけです。

医学部の友達

時が経って、大学医学部に入った夏休み前、歩いてると、夏の生暖かい風がヒューツと吹いて、追試に全部通って解放されてるのに、ものすごく心が虚しくなったんですね。

「あつ、そうだ。死の問題をどうするんだ」って、再びよみがえりました。

でも、医学部の友だちは病氣から人を救ってあげたいと医学を志しています。立派な、崇高なことです。でも、思春期ですから、友だちとファミレスで話し込むと、「俺は、それでは解決せえへんと思う」と言ってしまうわけです。たとえ病氣が治っても、いずれは老いに負けて死ぬ。そうであれば、医者とは根本的な問題を

解決するすべがないんじゃないか。そんなものを必死で勉強して何になるんやと。

すると、友だちは奇妙な顔をして、僕を宇宙人みたいに見るわけですよ。

でも、4歳ぐらい年上のN田さんだけは、「名越、お前の言ってること分かるよ。でもな、自分も問い直したけど、俺はそれでもやっぱり周りの人に生きていてほしい。だから、医学の勉強を続ける」って僕に言いました。まっとうで、すごいこと言う人だと当時は思いました。

僕は、身体の病氣を治す医療よりもむしろ、なんで生きてるんだろうとか、生きることにどんな意味があるんだろうと興味を持ち、心の病に向き合う精神科を選びました。

おかげで、その後、心身の両面で、いろいろな方々から話を聞くことができました。（談）

『御堂さん』2025年8月号

※冒頭の「命終畏（みようじゆうい）」は、インドの龍樹菩薩という僧が五怖畏（ごふい）を唱えたもののひとつです。ほかに「不活畏（ふかつい）。この先大丈夫か心配」「悪名畏（あくみょうい）。悪口言われてるかも」「怯衆畏（こしゅうい）。自信なくて人前怖い」「悪趣畏（あくしゅうい）。悪いところに堕ちるの嫌」があります。



「ちよつと先のご案内」

今年の報恩講は

横浜の「俱生院なごみ庵」というお寺のご住職「浦上哲也」さんと、その坊守様の「浦上智照」さんをお招きします。不思議なご縁で出あいました。坊守様は舞台女優さんでもあり、この度は「金子みすゞの詩の朗読」をお願いしようと思っています。

しかも、金子みすゞさんのお母様に扮して「娘に先立たれた母親が、娘の遺した詩をよむ」という一味加えた構成とうかがっています。

ご準備にご協力くださるお方は、よろしければお寺迄お声掛けくださいませ。

来年のお盆法要は

駅家町にある「のじまホームクリニック」の野島洋樹（ひろき）医師をお招きして、「医師×僧侶」のトークセッションをしたいと思います。「医療×仏教」私たちが納得できる人生の歩み」の糸口を、皆さんと探してみたいと思います。野島医師にはご快諾いただきまして感謝申し上げます。



沈思黙考...